

|         |                         |
|---------|-------------------------|
| 氏 名     | なか お ゆう こ<br>中 尾 裕 子    |
| 学位の種類   | 博 士 (文 学)               |
| 学位記番号   | 文 博 第 322 号             |
| 学位授与の日付 | 平 成 17 年 3 月 23 日       |
| 学位授与の要件 | 学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当 |
| 研究科・専攻  | 文 学 研 究 科 文 献 文 化 学 専 攻 |
| 学位論文題目  | 現代ロシア語における指小接尾辞の使用      |

論文調査委員 (主 査)  
教 授 佐 藤 昭 裕      教 授 庄 垣 内 正 弘      教 授 中 務 哲 郎

### 論 文 内 容 の 要 旨

現代ロシア語では、指小語 (diminutives) の形成が極めて生産的である。これは、指小接尾辞を名詞や形容詞の語幹に付加することによって形成される。例えば、男性名詞 dom 「家」に指小接尾辞 -ik を付加すれば dom-ik 「小さな家」、女性名詞 ruka 「手」に -ka を付加すれば ruč-ka 「小さな手、可愛らしい手」(接合部で語幹末子音 k → č の変化が起きている) といった指小語が形成される。生産的な接尾辞の種類は非常に多く、またその結果できた指小語の使用頻度も高い。例えば staruxa 「老女」に -ka を付加して staruš-ka 「(愛情を込めて) 老女」、-ečka を付加して staruš-ečka 「(さらに愛情を込めて) 老女」を作るといったように、異なる指小接尾辞を付加することにより、同一の語から複数の指小語を作ることができる。ロシア語社会では、日々の言語生活における様々な場面で、このような指小語が意識的に、あるいは無意識のうちに用いられ、豊かな表現手段として役立っている。本論文は、このような、ある意味でロシア語をよりロシア語らしくする表現手段とも言える指小接尾辞および指小語の意味と使用について、意味論、語用論、社会言語学といった様々な観点から総合的な記述を目指すものである。

全体は序章、結論を別にして六章からなる。そのうち前半の四つの章が従来の研究の概観も含めた意味論的な分析に当てられ、後半二つの章が語用論的あるいは社会言語学的な分析に当てられる。

第一章では、従来ロシア語学の枠の中で行われてきた指小接尾辞、指小語についての研究を概観し、ロシア語における指小語の定義を行う。そして、その基本的な性格として、1) もとの語と基本的な文法的性質が同一である、2) もとの語と基本的な語彙の意味が同一である、3) 感情性および表現性が高い、4) 「小さい」ことを示す働き以外に、感情的に肯定的あるいは否定的な評価を示す働きを持つことが多い、5) 原則として、肯定的な評価は「可愛い」「愛らしい」のような「表愛」、否定的な評価は「ちっばけな」「取るに足りない」のような「表卑」のニュアンスとして現れる、6) 口語的、俗語的で、格式ばった場面では用いられにくい、7) 広い意味での文脈と大きく関わり、様々な意味ニュアンスを示すことができる、といった特徴を挙げられることを示し、それぞれについて概観した。

第二章では、意味論の領域における先行研究を整理してその問題点を示した。そして、指小語の意味構造をより正確に理解するためには、まず指小接尾辞の働きと指小語の働きを明確に区別する必要があること、そして、それぞれの指小接尾辞が固有に持つ意味を正確に把握する必要があることを主張した。

第三章は、意味の面に注目してロシア語における指小語のカテゴリー全体を整理する試みである。従来のロシア語学における指小語あるいは指小接尾辞についての研究は、全体として膨大なものであるが、個々の記述を見ると断片的であり、体系的な議論が行われてきたとは言い難い。ここでは、指小語および周囲の関連する形式を語彙的あるいは文法的な特徴によってグループに分け、厳密な意味で指小語とすべきものとそうでないものを区別した。その上で、前者について、その品詞と使用される指小接尾辞の性格による分類を行った。その際、「中心的一非中心的 (周辺の)」、「表愛的ー非表愛的 (表卑的)」という二つの対立の軸によって指小接尾辞を分類することを提案した。そしてこれまで公開されたロシア語の指小接

尾辞、指小語に関する研究を網羅的に調べ、そこに扱われているすべての形式の意味について整理した結果、名詞に付加される1) -ok タイプ (-ok, -ek, -ko, -ka という形で実現する) 2) -ik タイプ (-ik, -iko という形で実現する), 3) -čik タイプ, 4) -oček タイプ (-oček, -eček, -očko, -ečko, -očka, -ečka という形で実現する) をもっとも中心的な指小接尾辞と見なすべきこと、そのなかで「表愛的-非表愛的」軸のほぼ中央にあって「表愛的」寄りに位置する -ok タイプを最も基本的な指小接尾辞と見なすべきことを主張した。

第四章は、前章でもっとも基本的とした -ok タイプの指小接尾辞に対象を絞り、その意味構造の記述を試みるものである。従来の、指小辞の意味の記述に当たって指小語の様々な用法をそのまま列挙するといった方法を取るとすれば、この -ok タイプの指小接尾辞は多義的であり、非常に複雑な意味構造を持つことになる。ときとして互いに矛盾しあう意味で使われるかのようにも見える。そこで、この指小接尾辞の意味を合理的に記述するために、Lakoff によって提案され、Jurafsky によってはじめて指小語の意味記述に導入された放射状の意味ネットワークという考え方を改訂して用いる。その際、1) 意味、2) 語用論的手段、3) 当該言語形式の使用と密接に結びつく対象、という三つの概念を区別することを新たに提案する。分析の結果、-ok タイプの指小接尾辞は「表愛的-非表愛的」軸のほぼ中央部にあるものの、その中核的意味として、この軸の「表愛的」側に位置する -oček タイプの指小接尾辞と同じように、「小さい」と並んで「親愛の情」という意味を持つことを示した。

第五章では、指小語の語用論的ストラテジーとしての使用のうち、特に丁寧さを表す手段としての使用に注目し、Brown and Levinson によって提案されたポライトネス理論の観点からその特徴を分析した。そして、依頼・忠告・助言といった場面で指小語が緩衝表現として使用されること、その際、相手の精神的・物理的負担を小さくすること（「ネガティブ・フェイス」に対する働きかけ）と相手に対する親近感の表出（「ポジティブ・フェイス」に対する働きかけ）という二つの異なる働きが同時に行われることを示し、それが前章で見た指小接尾辞の持つ二つの中核的意味「小さい」と「親愛の情」によって説明できることを主張した。また、店員やホテル従業員といったサービス業従事者の顧客に対する発話で指小語が頻繁に使用されることについて、あるいは逆に、かつてのソ連時代、弱い立場にあった買い物客の側から店員への発話において指小語が頻繁に使用されたことについて、基本的には親近感を示すための形式である指小接尾辞が、特定の場面における頻繁な使用により、「弱者」の「強者」に対して用いる表現として捉え直され、一種の敬意表現として機能するようになったという考えを示した。

第六章の議論の目的は、語彙論的観点および社会言語学的観点から指小語の形成と使用の実態を明らかにすることにある。まず、語彙論の立場から、指小接尾辞がどのような語に用いられやすく、どのような語に用いられにくい、どのような語から指小語が形成され、どのような語から形成されないかを分析した。その結果、指小接尾辞が使用される傾向にあるのは、概して「小さい」「可愛い」「好い」ものとして特徴付けられる対象を示す語であり、反対に「小さい」「可愛い」「好い」ものとして特徴づけにくい対象を示す語については指小語は形成されないという結論を得た。次に社会言語学的な観点から、指小語の使用に特徴的な人物像、反対に特徴的でない人物像を明らかにすることを試みた。指小語を用いた発話に関わる人物の関係およびそこでの指小接尾辞の働きに注目しつつ整理を行い、指小語の使用の典型的な受け手は「子供」および「子供」との類似性が高い人物であるという意識がロシア語話者に共通していることを示した。そしてその拡張として、男性から女性に対する発話、飼い主からペットに対する発話、大人同士の対話における子供に関する発話でも、同じように指小語が多く用いられることを示した。最後に、指小語の実際の使用状況を知るために、論者がロシア語ネイティブ・スピーカーに対して個別に面接形式で行ったアンケート調査の結果を提示し、それが本論文の記述内容を裏付けるものであることを示した。

以上のように本論文は、従来必ずしも体系的に研究されてきたとは言い難い指小接尾辞、指小語について体系的に研究することを目指し、指小接尾辞の意味を合理的に記述するとともに、指小語の実際の場面における使用を分析し、その実態を明らかにしたものである。その際、ロシアで行われた当該分野の先行研究だけでなく、ロシア以外で行われた指小辞、指小語の研究にも十分な目配りがなされている。また、自ら作成してロシア語母語話者のチェックを受けたもの、文学作品から採取したもの、先行研究から得たものからなる指小語の膨大な使用例を駆使して論を進めている点も本論文の大きな特徴である。

## 論文審査の結果の要旨

現代ロシア語では、指小接尾辞を名詞や形容詞の語幹に付加することによって指小語が形成される。例えば、男性名詞 dom「家」に -ik を付加して dom-ik「小さな家」、女性名詞 ruka「手」に -ka を付加して ruč-ka「小さな手、可愛い手」（接合部で語幹末子音の変化が起きる）といった指小語ができる。生産的な接尾辞の種類は非常に多く、その結果出来た指小語の使用頻度も極めて高い。日常の言語生活の様々な場面で、指小語が意識的あるいは無意識のうちに使用され、豊かな表現手段となっている。本論文は、このような、ロシア語の指小接尾辞および指小語の意味と使用について、多様な観点から分析することを目指したものである。

本論文の主要部分は、三章から六章までの四つの章である。前半では意味的な分析が行われ、後半は語用論、語彙論、社会言語学的な議論に当てられる。その主な主張は次の四点にまとめることができる。

1. 論者は、まず従来の必ずしも体系的とはいえない記述を概括したうえで、語彙化した指小語や愛称等を除いて研究対象を明確にし、「中心的—非中心的」および「表愛的—非表愛的」という二つの対立の軸を用いて指小接尾辞を分類することを提案する。これにより、生産的な接尾辞の中で -ok タイプ、-ik タイプ、-čik タイプ、-oček タイプの四つが中心的グループをなすことを示す。そして形態的に単純で使用頻度の高い -ok タイプをもっとも基本的な指小接尾辞とし、この接尾辞が「表愛的—非表愛的」の軸について中立の位置に近いものの、それでも「小さい」と並んで「親愛の情」という意味を中核的意味として持つことを、豊富な例を用いて示すことに成功する。この意味的な分析を基礎に、後半の議論が進められることになる。
2. 従来の指小語についての記述、研究ではもっぱらその「指小」あるいは「表愛」といった意味機能にのみ関心が向けられ、実際の言語状況における使用は議論されなかった。しかし指小語の使用は、単に指示対象が小さいことや愛情の対象になることを指すだけではない。依頼・忠告・助言の場面における敬意表現、緩衝表現としての使用も重要である。論者は、日本語のような明示的な敬語体系を持たないロシア語における、指小語のこのような語用論的使用に焦点を当てる。極めて興味深い論点である。そして中心的グループの指小語が使用されるとき、その「小さい」という意味により相手の負担を軽く見せると同時に、「親愛の情」という意味が、より積極的に親しみを表す手段として用いられることを明らかにしてみせる。
3. 一般のロシア語話者の多くは、指小語の形成は「ほとんど完全に生産的」であり、どのような語彙からも指小語を作ることができると考えているようである。しかし実際には制限がある。論者はその制限の根底にあるのが、「小さい」と「親愛の情」という二つの中核的な意味であることを示す。すなわち、実際に小さいもの、そのサイズが重要であるもの、感情的に肯定的なものを指す語彙からは指小語が作られるが、本来が大きいもの、サイズが重要でないもの、感情的に否定的なものを指す語彙からは指小語が作られないことを実証する。
4. 社会言語学的に見て、誰が指小語を使うか、誰に対して使うか、と言った問題も興味深い。論者は指小語の使用が「子供」と結びついていることを示した上で、指小語の使用に典型的な状況は大人から子供への発話であること、さらにその拡張として、男性から女性に対する発話、飼主からペットに対する発話、子供に関する大人同士の対話における発話があることを明らかにする。

以上本論文は、現代ロシア語の指小接尾辞、指小語について、従来の意味論中心の記述の不十分なところ、時として不合理なところを改訂するとともに、その使用の実際を明らかにするという観点から、多くの新鮮な観察を示したものである。論者が膨大な数の使用例を収集し、あるいは自ら作成して、極めて効果的に論を進めている点も評価できる。結果として、本論文は、現代ロシア語の指小接尾辞、指小語の意味と使用に関する研究として高い価値を持つものになったと言えよう。

一方で、本論文に欠点がないわけではない。その一つが、記述のバランスの悪さである。従来の研究を概括し、新しい分類の基準を提案した三章の議論は、全220ページのうちの80頁を占めている。後半の語用論、社会言語学的な議論に重点をおけば、より豊かな、さらに充実した記述ができたのではなかったか、とも感じられる。しかしながら、そのためにもまず意味的な記述をきちんと行う必要があったことを考えれば、この点も本論文の価値を大きく損なうものとは言えない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2005年2月21日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。